3つのキスは世界を軽くする

ししょー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3つのキスは世界を軽くする

【Nコード】

N7899V

【作者名】

ししよー

【あらすじ】

有名政治家を祖父に持つ高校生、斉藤晶は親友のカナエや後輩の無々子達に囲まれて平穏な日々を過ごしていた。それがある日、異世界人と出会い、非日常へと巻き込まれていく。

魔法使いつて信じる？（前書き）

作者の処女作となります。

前回、投稿させていただきました『幸運の主人』とは毛色が違いますが

こちらも読んでいただければ幸いです。

幾分かの冷却期間を置いたので問題点を見つけるために投稿してみました。

ぜひぜひご意見ご感想をお寄せ下さい。

魔法使いつて信じる？

「先輩、結婚してください！」

青年が朝一番に聞いた声がそれだった。

頬を朱に染め、響くほど大きな声で告白する彼女。

「いきなり結婚かよ、二段階ぐらい飛ばしてるなおい」

気だるげに反応する青年。

歩く道はいつもの通い慣れた通学路。

少女の脇を通りながら、青年はぼんぼんと頭を叩く。

頭二つ分程度、少女は青年より背が低い。

青年の背が平均よりも高いのもあるが少女が非常に小さかったのだ。

「あ、間違えました、婚約してください！」

後ろから小走りに追いかけてながら言う少女。

「いや違うから、普通付き合うつところからだから」

もう何度も繰り返した一連の流れだった。

「えーっと、じゃあ付き合ってください」

「無理」

きっぱりと断る。

「えー、減るもんじゃないですよ？」

「毎度グダグダな告白だな、どうにかしろよ」

あきれ顔で少女を見る。

だがそんな気恥ずかしいことを平気で言える彼女が好きだった。

「あたし馬鹿なので無理です」

きっぱりと断る。

「いや直せよ」

いつもの調子で十三回目の告白を断って、青年は聞く。

「お前さ、毎回振られてるけどダメージゼロだな」

けるっとした表情の少女は失恋したとは思えないほどニコニコしている。

「こつみえて結構傷ついてるんですからねー？」

と、言いつつも笑う。

靴箱で履き替えると

「先輩！ ラヴですー！」

ブンブンと元気よく手を振る少女とは対照的に軽く片手を上げただけの青年。

青年 サイトウ マキラ 齊藤晶 はいつものように自宅のあるマンションに帰り、いつものように自室の扉を開け、いつものように靴を脱ぎ、いつものようにリビングまで歩き。いつもと違ったことに出会った。

「おかえり」

「ただいま。……ん？」

反射的に出た言葉に疑問を覚える。

自分にはそんな言葉を発する相手はいないはずだと。

そこにいたのは、銀髪の少女だった。

その少女は片手を上げて晶に挨拶し、さも家の勝手を知っているような態度だ。

「隣に引越してきた者だ、引越しの挨拶に上がらせてもらった」

赤いリボンで束ねられた銀髪が揺れて、青い瞳がこちらを見る。

心の奥が覗きこまれる気がして、眼をそらす。

「ああ、どうも……、ん？」

鍵は閉めていたはずと思いだし、

「不法侵入者の間違いだろ」

少女は話を続けた。

「はっはっは、これから長い付き合いになるのだからゆっくり話でもしようじゃないか、ちなみに訂正しておく、私は不法入国者でもある」

そう言っつて懐疑的な目をものともせず座るよう促す少女。

「帰れ、母国に」

「ふう、照れてまともな会話できないとは美しいのも罪だな」

大仰に頭を抑え、困った風な顔をする、その仕草と口調が幼い容姿に対してまったく合っていない。

「照れてねえ、どこに照れる要素があるんだよ」

たしかに自称するだけあって少女は美しかった、

少女が異国出身だということはわかるのだが、具体的にどこかというのとは分からない、ただいちいちの動作が大仰なのが強烈な違和感としてあった。異国風ではあるが日本語をきちんと話すことが出来るのも違和感を助長しているのかもしれない。

「態度とは裏腹に少年はこの時、恋に落ちていたのだった」

「いやいや落ちねえよ、むしろどうして落ちると思った」

呆れながら言っつ。

「で、お前はどこの国出身なんだ？」

「い……」

イタリア、イングランド、イギリス、と、思いついたものを晶の頭の中で浮べる。

「いーすとさいどすとーリー？」

「会話成り立ってねえよ！」

少女の独特なペースに若干の苛立ちを感じ始めた晶が本気で追い出そうと思った時、タイミング良く少女は立ちあがり、部屋の外へ歩き始める。

「君のお爺さん、道雪翁から君の仕事を助けるよう請われてね」

「なに？」

齊藤道雪、その言葉に嫌でも反応させられる。

自らの祖父にしてフィクサー、キングメイカー、などと呼ばれる男だ。

「道雪翁から近々使いを送ると聞いているだろう？」

薄く笑う。

そしてその声から聞かされる事実は、晶を非日常へと引き込んだ。

「ナミセ カスミ波瀬霞澄、君たちから見れば、異世界人だ」

それは晶自身を苦境へと立たせたのか、それともあるべき才能を發揮できる場へと連れて行ったのかははっきりとはわからない。

警戒の色を強め、聞きただす。

「爺様から何か言付かっているか？」

祖父の使者であれば警戒の色も強まる。

「いや？ それにしても爺様だなんて。君は道雪翁が嫌いだと思っ
ていたんだが」

(どこでそんなこと聞きつけやがった)

「ハ、っーことはなんだ？ 俺の監視が目的か？」

「あっさりと認めたものだね」

「お前にはれてるならジジイにも感づかれてるだろうよ」

「鎌をかけていたとしたら？」

「する理由がない」

「上等、いい判断だ、晶君」

にっこりと笑いかける。
愉快そうだった。

「安心してくれ、敵対の意思はない、むしろ好意を抱いているくらいだ」

「どうにも信用できないね」

よくわからない奴だ、そういつた感想を抱いている。
素性に関してもよくわからない、会話の主導権も握られたまま。
作為的な口調。

話がうますぎるとしか思えなかった。

「手の内を明かそう」

人差し指だけを立てて晶の眼前に持っていく。

「いつつまじつく」

その指先には少し空間があり、その上の何も無い空間に炎が灯っている。

「……手の込んだ手品だな」

少し間をおいて、炎は様々な動きを見せる。

「魔法という奴だ」

信じられないものを見せつけられ 実際未だ信じるに至らない
ほどののだが 驚愕に至る。

「本当に異世界人だとかいうファンタジーな人間なのか」

「信じてもらうほかない」

はやる気持ちを抑え、いったん息をのみ、呼吸を整え、静かに口を開く。

澄んだ蒼い瞳はこちらの全てを吸い込んでしまいそうだった。

「規模を大きくすることは可能か？」

肯定。

「魔法に関しては私以上に使いこなせる者はそういないよ」

なんてこつた、道雪の奴、魔法だ、異世界人だ、なんてふざけたことを言いやがるもんだから、てつきりボケたかと思っていたが本当だったのか。いや最初から信じるべきだったんだろう、あの道雪が言っただけだから。

少女は靴下のまま玄関を出る。

「それではこれから長い付き合いだ、よろしく頼むよ、晶君」

変人のオンパレードである交友関係を思い出し、そこにまた一人変なのが加わるのかと思うと少し憂鬱になった。

だがしかし、晶が熱望してやまなかった武力を今もって手に入れたのだ、それが彼の行動に大きな勇気（ここでは蛮勇かもしれないが）を与えたのだった。

晶は高校生であるから、当然高校に行っている。

地元の有名私立学校の屋上、見晴らしのいい景色が広がる場所で晶は昼食をとっていた。

晶の眼前には一人、同年代程度の少女が立っている。

少女の蒼い瞳は怒りに燃えている。

「晶！ てめえ勝手に女作ってんじゃねえええ！」

掴みかかった少女に晶は鬱陶しそうに顔をそむける。
長い金色の髪が晶の頬にかかる。
力を込めた指先は晶の肩をしっかりと掴んでいる。

「ちが、痛い、ちょ、違うって言ってんだろ」

「何が違うんじゃあああ、怒らねえから言ってみろや！ おらあああああ！」

少女はスカートのまま跨り全力で揺さぶる。
肩を掴んで揺さぶる。

金色の髪が揺れる。揺れる。
十回ほど揺れたところで晶が止める。

「落ち着け、日本語おかしいぞ。お前もつぶちギレてるじゃねえか！」

「ぶちギレてねえしー、キレる子どもじゃねえしー！」

拗ねたように言う。

「いいか、カナエ、よく聞け、アイツはマジで違う」

目の前の金髪少女 カナエ 神 アユム 歩夢 に諭すように言う。

「俺は別にアイツに何の好意も抱いていないし、もちろんその予定もない、おーけー？」

自分の上から退くように手で促す。

「ああそんなの勘違いしちゃうってごめんねー、ってなるか！ お前が手を出さないわけがねええ！」

カナエは再び揺らし始める。

「いつから俺はそんな飢えた狼みたいな奴になってるんだ」

晶が頭をぐわんぐわんと揺らしながら言う。

「マジでちょーむかつくぜ。去年の俺なら腹パンかましてるぜ、マジ俺すげえよ？ パンチングマシンで百とか普通に出るし」

俺、という少女の一人称を気に留めることもなく、晶はいなす。

「あー、はいはい」

「ったく俺出し抜いてなにいちゃいちゃしようとしてんだ、ああ？」

いつまで絡まれるのかと鬱陶しく思っていたところで、昼休み終了のチャイムが鳴った。

教室に戻ると自分の席の隣に昨日の少女が座っている。

「やあ晶君、昼休みはかわいらしい女の子と屋上へ上がったのを見たのだが、あれかね？ にゃんにゃんしてたのかね」

そう、こいつだ、こいつが今ここにいることが元凶なのだ。

「……にゃんにゃんとかいつの言葉だ、アイツはそんなんでもねえ、

ぶちのめすぞ」

午後の授業開始の号令と共に、晶はぼんやりと朝の出来事を思い出していた。

自宅のマンションから登校し、朝のホームルームの少し前にアイツは現れた。

朝、ホームルームが始まるかという時間に勢いよく扉が開いたかと思うと、銀色の髪をなびかせ、赤いリボンを弾ませながら彼女が悠然と教卓まで歩き、自己紹介をし始めたのだ。

「諸君、静粛に。静粛に。静粛にしろゴミども。私の名はナミセ、波瀬霞澄だ。今日から君たちと共に勉学に励み、己を高めていきたいと考えている、この国に来て日は浅く分からないことも多いがよろしく頼む、以上だ」

高校二年の五月という妙なタイミングであるのだから嫌でも注目されるもののだが、ナミセと名乗った彼女のふてぶてしい態度は生徒たちに衝撃を与え注目してくれと言わんばかりの自己紹介だった。

「皆、返事はどうした」

「よ、よろしくお願いします」

気圧されたクラス全員の返事にナミセはうむ、と唸った後、扉の方を向き、一言。

「どうした田中教諭、早く入ってきたまえ」

すすすこと入ってくる担任田中に生徒の同情が集まる中、ナミセは晶に声をかけた。

「おお、ぐつどもーにんぐ、晶君。昨日は押しかけてすまなかったね、今日はきちんと色々話せると嬉しい。田中教諭、私は晶君の隣に座るが構わんだろう?」

思い返せば最悪だった、これのおかげであるアホ　カナエ
にまた絡まれるネタが増えた。

放課後、ナミセが足早に帰って行ったのを見て、晶も帰ろうと席を立つ。

カナエの蒼い瞳が晶を見ていた。

「……」

「……なんだよ」

無言の間に耐えきれず、晶は声を出す。

「あの子、俺に紹介しろよ」

彼女の要望に一瞬逡巡し、

「いいけど変人だぞ」

了承した。

「かわいいから問題ない、転校生ってなんか萌えるじゃん？
おとしやすそうだし」
……

「後半が本音か」

頭の悪そうな発想に呆れて、

「ああ、わかったよ」

と、生返事をして、その後、帰宅した。

魔法……ですか？

晶は帰宅後、すぐにスーツへと着替えて外出の準備をする。

祖父である道雪の手伝いを任されているのだ、今までも何度か御曹司として色々な集まりには出たものだが、今回は直接的に関わることになる。

チャイムの音、インターホンにはナミセの顔。

「すぐに出るから、ちょっと待ってる」

部屋を出ると、制服のままのナミセが立っていた。

「やけに早いと思ったたら着替えてないのか、夜遅くに制服は目立つ、適当なのに着替えてこい」

「なるほど、夜遅くに制服のままじゃ入っちゃいけないようなどころに行くつもりなのだね？ 承知した」

「お前頭おかしいだろ、いいからさっさと着替えてこい」

ナミセは隣の号室なのですぐに自室に戻り、数分後、ボーイッシュな私服を身にまとって出てきた。

「ん？ 男物か？」

違和感。

「こちらに来てまだ日が浅くてね、ろくに服を持っていないのだよ」

違和感の正体に気付く。

「……今気付いたが、それ俺のдар」

「……………」

沈黙。

「てめ、昨日俺のここに来てたのはそれか！ 何勝手に物色してんだ！」

「何って食料と飲料、衣料、金銭ぐらいだよ」

「他にも色々とってんのかよ！ 返せこら！」

「服の一つや二つでそんなに怒ることないだろう？」

「お前それ窃盗だからな？ 反省しろ、ついでに猛省しろ！」

「あいむそーりー」

「ケンカ売ってんのか！」

仕方なしに貸与という形をとって街へ出ることにする。

夕暮れに照らされる街へ出て、最初に向かった先はとある事務所だった。

晶は政治家の孫だ。

それも、史上最大のフィクサーと呼ばれる男のだ。

今日は道雪に頼まれている活動の一環として地元有力者と会う約束をしている。

約束はしてあるので、すんなり目的の人物に出会えた。

ナミセを紹介したところ（もちろん異世界人などとはいわず、活動協力者としてだが）、少し訝しがったが、すぐに話を切り替え、歓談の後、目的である今後の予定に関して話す。

男はまず話し始めた

「街での暴力沙汰が増えています。しかし裏稼業の連中は目減りしていつている」

「新たなグループが入ってきたのでしょうか」

晶は普段からは想像できないような丁寧さをもって話をする。

男は苦笑した後に話を続けた。

「これは噂の類なので笑い話として聞いていただけると嬉しいのですが、何やら魔法のような力を使う輩が出てきたそうなんですよ」

それに対して晶が聞き返す。

「魔法……ですか？」

「おそらく手品師だとか占い師だとかそういう類でしょう、あまり信用なさらなくてください」

「冗談を言ったつもりで笑っている相手の男とは別で、晶は顔では笑うものの、心の中ではすでに思考を始めていた。

その後、ある程度、そこいらに詳しい連中について見当はあるか

と聞いた後にその場を後にした。

外へ出ると夕日は沈み、夜が街を包みこんでいた。

「さて、今からお前自身の話を聞かせてもらおうか」

ナミセに視線を向けるとどうぞとといった風に手振りした。

こついつた芝居がかった様子が胡散臭さを感じさせる。

二人は近くのレストランに入る。

注文を終え料理が出た後で、再び晶が切り出す。

「その異世界人、つまりお前の仲間は他にもいるのか？」

声はせわしなく働く者たちや談笑している他の客によって二人にしか聞こえない。

「ああ、いるよ、先ほど出会った人の言っていたのはおそらく同胞だろう。実のところ、私の住んでいた世界は数年ほど前に　ああ、向こうとこちらで時間の速さが違うからそこの数字はあまりあてにならないが　滅んでしまっただけ、亡命といえはいいのだろうか、こちらの世界に流れ着いたのだよ。難民だね、私たちは」

さして深刻そうな顔はせずに淡々と語る。

「滅ぶ？　住めなくなっただということか？」

疑問に眼を細め、ナミセは続けて語る。

「……最初は環境汚染のようなもので、立ち入れない地域が出来たぐらいの甘い認識だった……、その後、着実に汚染区域は広がり、ある日突然、世界の一部が消失したんだ」

「消失？」

「そう、消失だ、何も無い状態がそこには在ったんだ、たくさんの人間が調べようとして、無になった、近づくことすら不可能だったのさ、無が在った、ということを理解できたのも私以外には数名程度だ、何百、何千という人々が近づいたというのに……！」

先ほどとは打って変わって、感情を見せる、内に秘める悲憤を。

「結局、原因はわかったのか？」

「戦争だよ、おそらくはね、結論は出ていないが、主たる要因はそれだろうと思っている」

「戦争？」

頷いて自らの持論を切りだす。

「私の持論だが、戦争で多くの人命が失われたことが原因だと思っている、君達の世界は人がいなくなったといっても世界が消えたりはしないだろうが、我々の世界は人が世界の構成要素として機能していたのだと思う、ゆえに、人が滅り続ければ世界は自らを保てなくなり……、そして滅びたというわけだ」

持論を並べ立てた後にひと時置いて、

「ま、私の勝手な思い込みかもしれないがね」

と、己の見解を言う。

「お前も参加したのか、その戦争に」

おずおずと聞きだす。

「ああ、率先してね。私はあの時、戦争を終わらせるための戦争を行っていたんだ、何度も何度も、それが叶う日が来ると、自己矛盾に気づかぬまま、偽悪と偽善を重ね合わせて……」

何かを言いかけてナミセはそこで話を止めた。

自分の中身は見せたくないわけか。

これ以上、この件に関しては詳しくは聞けないだろうと、晶も話を切り替える。

「協力条件の確認をしよう」

一拍置く。

「今回の件に関して波瀬霞澄は全面協力を惜しまないということ、対価として、今回の件が終了後、異世界人の帰化事業に政府は協力を惜しまないこと、異世界の遺物に関しては全て異世界人側で管理、保管するということ、重要人物である別途報告済みの人物は異世界人側で処理する、これでいいんだよね？」

「ああ、それで構わない」

「重要人物ってのはどういった方々で？」

ナミセが若干顔をこわばらせる。

「世界を根源から否定できる連中さ」

「具体的に聞いていいか？」

「さあて、私も会ったことのない連中が多くてね」

「んなもんどやっ探すんだ」

半笑いで聞く。

「名前は知っている、あれは、我々の世界そのものなんだ」

息をのむ。

「危険なのか？」

「この世界を滅ぼせる程度には」

最初の接触だ、これ以上聞き出すのは得策ではないだろうと、晶はそこで話を切り上げた。

ナミセの蒼い瞳はこちらを見通してくるようで、少し怖い、とり憑かれたように魅入られそうになる。

魔法……ですか？（後書き）

いやはや、過去の自分の作品を見るとというのは想像以上に
なんというか、書きなおしたくなる欲求に駆られるものです。
お、おう……、という感じです。

それはとても楽しいもの

食べ終わったナミセと晶が外に出ると、街の喧騒は入る時よりも少し静かになっている気がした。

足がコンクリートの地面を蹴ると同時に声をかけられる。

「斉藤晶……だな……？」

三人ほど男が立っていた。

堂々と名乗ってやることにした。

「その通りだが？」

わずかな思案を置いて、彼が好意的感情を持っていないことを判断する。

「おいナミセ、お友達か？」

「残念ながら友達は少ないほうだね」

「俺もだ」

諧謔的な会話が交わされる。

「悪いが一緒に来ていただきたい」

有無を言わせぬ様子だった。

「男とデートは嫌だな」

男は押し黙る。

そして脇にいた男二人がこちらへと近づいてくる。

「お前と出会って初日でこれだぞ、怨むぜ」

晶は半分本気でそう言った。

「ああ、先に行つとくが、私の力でも君を守りきると保証はできないからあしからず」

じゃあ、と晶が言ったときにすでにそれは始まっていた。

「やられる前にやれ」

この日から起こる全ての事象を表すかの如く、炎は道を駆け抜けた。

空から見るとちょうど一文字に火で染まる道路がある。

火蓋は切つて落とされた。

ナミセの手から放たれた炎は眼前を焼きつくした。

目の前には真っ赤に染まる道、わき道から迂回を試みる。

辺りで怒号ともとれるような声が響く。

「二十はいるな」

ナミセの報告に天に唾を吐きたくなる気持だった。

「全員片づけられるか？」

「逃げないのかね？」

意外ともとれる晶の好戦意欲に質問をする。

「あいつらが何者かはわかんねえが家が無事なわけじゃねえだろ？」

愚問だったなとナミセは心の中で笑う。

彼は理屈をつけてはいるがこの状況を楽しんでいるのだ。

「二分、それだけあれば片付くが」

「任せた」

ナミセの走る体が足から靄と化して消えていく。

徐々に加速しつつ、人としての形を失っていくそれはわき道を抜け再びそれなりの大きさの道路へと出ようとしている。

前方に人影三人ほど現れるがそれを靄と化したナミセが『轢き殺して』いった。

一人になった晶は出口付近で金属音がすることに気づき、足音を立てずに近づいた。

案の定二人の男がナミセに気を取られそちらに銃器と思わしきものを撃っていた。

護身用の伸縮式警棒を取り出し、躊躇なくそれを一人の後頭部に走らせた。

くぐもった声を漏らしたそれが倒れる前に後ろに回り支えつつ押し戻し、こちらに気づいたもう一人に蹴飛ばしながら押し倒す。

馬乗りになり、身動きのとれなくなつたもう一人に対し柄の部分で執拗に顔面を殴りつける。

すでに戦意を失いつつあるのもいとわずに殴り続け、そいつが気を失ってから三秒ほどしてそれに気づいてやめた。

心に何の感慨も抱かなかった。

辺りを見回すといくつかの建物が炎上している。

気を失っている二人から襷掛けしている銃器を奪う。

扱えるかどうかの問題ではない、単純な威嚇効果を狙ったことだった。

来た道から足音と声が聞こえる。追手だ。

「楽しくなってきたなあ、おい」

奪った銃器を手に道路の対岸にある路地に駆け込む。

寸前に通った建物の壁が破碎する。撃たれている。

ゴミ袋やポリバケツといったものを道に散乱させながら、奥へ奥へと走る。

ちょうど、くの字に曲がったところで足を止めた。

奪った銃器を確認する、知っている銃器よりも幾分か軽い、どういった材質なのかはよく分からない、先ほどまで使っていたのだからすぐに使えるだろうと判断する。

来た道のほうへ銃だけを突き出しトリガーを引く。

何の反応も起こさない。

自分の力では扱えないと銃身を持つ。

向こうから来る靴音の反響音で距離を測る。

突如、熱気が吹き込んでくる。

ナミセがそこまで来ていると踏んで、身をさらす。

笑いだしたいほどに出来た場面だった。

ナミセが、そこに『在った』。

『在った』のだ、厳然たる存在として、その姿は神々しく、炎に包まれた聖女の如く。

これが魔法かと理解した。

その姿に誰もが釘付けになっている。

男達が挑みかかり燃えさかって消える様は童話にあつた姫を救出する騎士の姿にも似ている。

では彼らの背後から襲いかかる自分は何であるのかと自問する。そんな疑問に意味などない、彼女は聖女でも姫でもなく、彼らは騎士ではないのだから。

そして彼は蛮声を上げ殴りかかる。

自らの部屋に戻った晶は混乱した思考の中で整理をつけていた。いや、整理をつけたとは名ばかりの逃避だった。

思考の隅に全てを追いやって、ナミセの声すらも遠ざけ、ただ夢の中だけに逃げ場所を求める。

ふと意識が消える間に、ナミセの寂しげな蒼い瞳が記憶をかすめた。

「ヘイズだ」

ぼつりとつぶやいた少年に対し、隣にいた従者は聞き返す。

「ハゼ・ヘイズ？ 歴史上の人物では？」

少年の顔は険しく、ただ思慮している。

問う疑問に答えは返らない。

「アリス様？ こちらで処理しておきますがよろしいでしょうか？」

従者の言葉には、そう答えろと言う威圧があった。

飾りものである自分はそれに頷く。
従者はそれから場を静かに去った。
少年はただ一人になっても呟き続ける。

「もう、全ては終わったというのに……」

誰に言うわけでもなく。

一つ、長く深いため息をついた。

「全てを始めるのを邪魔しないでよ」

雌伏の時は終わった、さあ、至福の時を始めよう。

人々は彼をなんといいだろうか。

誇ろつか？ 憎もつか？ 畏怖しよつか？

彼の闘争は始まった。

それはとても楽しいもの（後書き）

おおう、久々に自分の文章を見ましたが、こんなのだったのか、当時の私は。
なんとというか複雑な気分です。

8 / 15 名前を変更

Wanna be

翌朝、晶はナミセに起こされた。
昨日のことはよく覚えていない。

いや今でもその情景が手に取るようにわかるほどに記憶は鮮明だ。
だが何かが思い出すなと拒否している、それは彼の人としての知
恵なのか、人である最後の一線なのかはわからない。
面倒な思考を全て投げ捨てるように起き上がる。

「やあやあ、晶君」

朝っぱらからうるせえなと嫌がりながら、目の前で宙に浮いたそ
の存在を見る。

「なんでもありだな」

ずいぶんと順応したなと自嘲する。

「今日はどうするんだい？ 家を監視されてる様子はないけど」

この情報を裏付けるものは何もない。

しかし、昨日の超常現象を見ていた彼にとっては妄信してもよい
と判断するものだった。

「いつも通り学校に行く」

当たり前だ、というように答えた。

何か言おうとしてナミセはやめた。

晶はシャワーを浴びに浴場へと入って行った。

「他人の部屋でシャワーの音を聞くと、こっ、エロスを感じるね」
「うるせえぞ」

テレビでは昨日の火事についてニュースキャスターが緊迫した事情を伝えている。

晶の日常は変わっていなかった。

二人は一緒に登校し、教室へと入り、

「朝から見せつけてくれるなあ？ ええ？」

カナエに絡まれた。

「だから違っつて言ってるだろ……」

そつえば紹介がまだだった、とカナエをナミセに紹介しようとして二人が会話を始めた。

「君は確か、神 歩夢君、だったかな？」

「波瀬霞澄さんだよな？ カナエって呼んでね、よろしくー！」

態度豹変早いなおい

「承知した、それではカナエ君、この前、屋上で晶君とにゃんにゃんしていたそうなのだが……、ど、どうだった？」

何を突然言い出すのか、と晶が制する間にも会話は続く。

「え？ そんなことしてないよー」

「そうか、聞いた話によると……、そのカナエ君が晶君に跨って」
う、ゆらゆらとだな……」

遠からず近からずといったところだ。

「いや、ちょっとよくわかんないなー」

「そうか、なら安心した、何せ、晶君は私と結ばれるのだからね」

「えっ」

笑顔のまま晶の方へ向き、ゆっくりと首を絞める。

「違う、誤解だ、やめろ」

「いや、しかし、校内一の美少女相手となると少々不安だったのが安心したよ」

「そんなことないよー、ナミセさん『も』かわいいよ」

まぶしい笑みを振りまき、スカートをはためかせてナミセの方を向いた。

カナエは晶と会話するときのみ非常に言葉づかいが悪いが普段の受け答えはまともな方である。

妙に攻撃的なのはおとすのは諦めたということだろう。

「ははは、私をそう褒めないでくれたまえよ、まあ自覚と礼賛を受ける資格はあるのだが、はっはっは」

「嫌味言ってるんだけどなー……」

「そういえばカナエ君、君は晶君と仲がよろしいようだが」

視線を一度、晶に向けてから戻す。

「恋仲なのかね？」

後ろで聞いていた晶が噴き出す。

慌てて否定を入れるために、二人の会話に割って入った。

「誤解される前に突っ込んでくが、付き合っていないから俺達」

「うっせー！ テメーはすっこんでろ！」

「地が出てるぞ」

「お、マジか？ マジだ、わりい、わりい」

コントのような二人にナミセが確認をとる。

「ふむ、それでは晶君とカナエ君は付き合っていないのだね？」

「ああ、というか、それ以前にカナエはな……」

一呼吸置いて告げる。

「男だ」

長い沈黙。

それもそうだろうと晶は思う、見栄えだけでいえばそこらの女性を嫉妬させるほどの美少女だ、実際にナンパされたことや男子生徒から告白を受けたこともあると聞いている。

だが、カナエは男だ。実際に確認したことはないが本人がそう言っているのだからそうなんだろう。

そしてバイだ。

「……つまり付き合ってるのではなく、『突き合ってる』というところか」

「待て待て待て、思考がぶっ飛びすぎだお前」

「なるほど、濃い仲間わけだな、恋仲間だけに、ははは」

「おい、違う、待て、寒いこと言いながらお前は重大な誤解をしている」

必死に否定を重ねる晶に対して、ナミセは乾いた笑いを繰り返していた。

「カナエ、お前もなんとか言ってく」

「ざまあねえなあ晶！」

この後、ナミセの誤解を解くのに放課後までかかった。

「今日、晶の家に行つていいか？」

放課後、カナエがそんなことを言い始めた。

ナミセがさすがに夜まで遊んでいられる余裕はないとそれを制しようとしたが、

「いいぞ」

その言葉で、ナミセは朝に感じた違和感の正体に気づいたのだ。

その違和感の正体に気づいたからこそ、そこでは閉口せざるを得なかった。

そしてそれを誤魔化すようにそれはいいな、と相槌を打った。

「晶君がよければ私もお邪魔したいのだがいいかね？」

しらじらしいな、と晶は内心笑いながら

「まあいいぞ」

二人の歓声上がる。

「そういえば晶は一人暮らしだな、実家は遠いのか？」

「いや、割と近いな、まあ家庭の事情ってやつだ」

カナエの質問を軽く受け流す。

「てつきり女の子を連れ込んでにやんにやんしたいがためだと思っ
ていたのだが」

「ナミセさん、下品だよ、晶はそういう男だけど」

「俺のイメージってそういう方向なのか……」

ナミセが茶化し、それを笑う声が夕暮れ時の道に響いた。

晶が自宅の鍵をあけると晶を放って二人はお邪魔しますと叫びな
がら中へと駆けこんでいく。

「おー！ 久しぶりの晶の家だ」

部屋の奥で歓声上がる。

「懐かしいな晶！ まだ置いてたのかこれ」

見ると昔にやった記憶のあるゲーム機だった。

「む？ それは？」

「ゲームだよ、ゲーム、スーパーゲーム野郎」

「ほお、それがゲームか、カナエ君、私は何分、日本に来て間もな
くてね、あまり娯楽には詳しくないのだよ、良ければご教授願いた
い」

異世界人なのだからこういうゲームなどといった文化には触れた
ことがないのだろうな、と勝手に晶は推測した。

二人プレイまでのゲーム機なので晶はおとなく菓子と飲み物を

用意し始めた。

「やっぱ定番はこれだよなー」

一人で楽しそうにするカナエが出したタイトルは『星の侵略者ワナビィ』だった。

カセットを差し込み、起動する。

「カナエ君、なんだ、この赤黒い生き物は」

「ワナビィだよ、かわいいよね」

ナミセは画面に映る赤黒い生物にかわいいという要素は見当たらないので返答はせずにおいた。

「ワナビィはね、星を侵略しようと考えてるんだけど、なかなか実行に移さない怠けものなんだ、口癖はこれなら俺でもできる、俺の方が凄いや、とかだね、前作では結局自分は何もやらずにサブキャラクターが主人公になっちゃってたけど、今回はちゃんと頑張るよ！」

「現代日本の何かを志すも行動を起こさない者たちを皮肉ったゲームというわけだな」

「ノーコメントで」

「ワナビィの顔の周りについてる出っ張りはなんだ？」

「手と足だよ」

「顔から手と足を出すとは面妖な」

カナエがコントローラーを持ちワナビィを動かす。

「ちょっと待っててね、仲間作ってナミセさんも出来るようにするから」

「了解した。む？ 前方に変な生き物があるな」

「そうそう、こういうモンスターを食べて」

ワナビィが口を大きく開けてモンスターにかぶりつく、シヨッキンクな映像がモザイク付きで流れる。

「全然可愛くないと思うのだが……」

モンスターを食べ終えたワナビィの体に異変が起きる。

「こっやって進化して……」

若干、姿の変わったワナビィが排泄を始める。

排泄物が形を為し先ほどのモンスターの色違いになる。

「はい、ナミセさん完成！」

「排泄物を仲間にするとは奇怪な……」

しばらくカナエが嬌声を上げながら、そしてナミセは感心と驚愕を繰り返しながらプレイする。

気付けば夜遅くになっていた。

Wanna be (後書き)

『幸運の主人』の方、続編を執筆中。
よろしければキャラ人気投票にご協力ください。

よろこんで

玄関がその時、急に開いた。

晶はソファに寝転がったままそちらに視線を向け。

ナミセはびくりとそちらへと体ごと向け。

カナエはテレビ画面に集中したままだった。

「どもつす！ 先輩！」

「なんだ、お前か」

晶は視線を再び読んでいた漫画へと戻らせた。

そして二人に語りかける。

「おい、お前ら飯どうするんだ？」

晶がカナエのバッグに入っていた漫画を読み漁りながら聞く。

「え？ あー、もうそんな時間か」

「む？ そのようだね、長居しすぎたようだ」

ゲーム内ではちょうどボス戦が終わったところで、二人が時計を見て似たような反応を返す。

「食っていくか？ 適当なものでよければ作るぞ？」

と、言いながら視界の端にある存在を捉える。

つまり、こいつが作るが、という意味である。

「ふふ、晶君、ただで飯を食ったのだから代わりにお前を食わせろ、だとか言い出すんだらう？」

「言つか！」

「そ、そんなつもりだったんだ、信じてたのに……」

「お前は男だろ！」

一呼吸置いて、台所へ向かう。

「ったく、適当に作るがいいな？」

カナエがおう、と返す。

「私もいいのだろうか？ 晶君には世話になってばかりなのだが」

「あー、別に気にすんな、カナエにはよく作ってやってるしな」

「そうなのか？ ありがたい。一つ貸しが出来たな」

そう言って、あどけない笑顔を見せた。

こうしてみればかわいいもんなのだが……、普段からこうならしいのにな。

そして隣にいる彼女にようやく声をかける。

「さて、何作るうか？」

程なくして夕飯が出来上がる。

「毎度、お前の手料理食う時思っただけどさ、統一感ないよな」

「嫌なら食うな」

「食っけどさ」

野菜炒めとは名ばかりのもやし炒め、ソーセージ、ご飯から揚げ、インスタントの焼きそば、と色々品数はあるものの、統一感はない。

「誰かさんに昨晩色々盗まれてな、満足に作れなかったんだよ」

「泥棒に入られたのかね？ それは心配だね晶君、よければ私が留守番でもするが」

「お前のことを言っただよ！」

「私か！」

「なに、え、何で私？ みたいな反応してんだよ！ 一昨日もろに侵入してたじゃねえか！」

「そっいえばそうだったな」

妙に感心したように深く頷く。

「ん？　なんかあった？」

「気になったカナエが話に混じる。」

「ややこしくなるからお前は黙って飯食ってる」

食べ終わり、食休みを置いた後に解散する流れとなった。

当初は異世界人にこっちの世界のものが口に合うのかと心配していたが杞憂に終わった。

「それでは晶君、また明日」

「またなー！」

「おう」

ナミセは隣に帰るだけだったが。

二人が部屋を出て行ったのを確認すると、晶は彼女に声をかけた。

「無々子」

七篠ナナシノ 無々子ナナコ、彼女の名だった。

「先輩、さっきの人ら、物凄いスルー力でしたね」

「お前はギャグ体質だからな」

「もしかしたら晶先輩が本当に女の子を囲い込んでるなんて！　っ

て驚いてただけかもしれませんよ」

「冗談になってない」

ひきつった笑いだった。

「ほとんど困い込みと変わりませんからね」

こうして夕食や時には朝食まで作りに来てくれるほどの世話を焼いてくれる後輩に心から感謝の言葉を贈る。

「ありがとうな」

少し照れた表情を浮かべながら、思い直したように眼を鋭くする。

「ていうか、あの女の人、誰なんですか」

なんと説明したらいいか、少し勘案した後、

「友達だよ」

そう答えることにした。

それはあまりにも自然だからこそ、彼女にとっては不自然になった。

「友達？ 先輩、友達少ないのに」

「うるせえ、少ないだけで友達はいるの！」

アリス・ソフィーはハゼ・ヘイズと対話していた。

「何が目的で？」

ヘイズはそう問うた。

「世界を再生するために」

そして彼はそう答えた。

「だから力を貸してほしい」

かつて世界を滅ぼしたものにしか出来ないことだった。

「よろこんで」

いつの日か見た夢を叶えるために。

「世界を滅ぼすお手伝いをしよう」

二人は歩き出した。

馬鹿

晶は少し遅刻気味の時刻に目が覚める。

いつもは余裕ある支度なのだが、今日ばかりは手早く支度し家を出る。

家と学校が近いこともあり、遅刻は免れた。

晶は学校へ行くことが好きだ。

厄介事とは無縁な平和な学園生活が好きだ。

それを現実逃避と言われればそれまでなのだが、とにかく晶は学校が好きだ。

ゆえに足取り軽く、学校へ向かう。

学校に着くと既にナミセもカナエもきており、晶は自席に座る。

すぐにホームルームが始まり、授業が始まる。

今日はまた街に出てみるか。

そんなことを考えながら過ごす。

いつも通りに黒板を写しながら授業の要点をマーカーで記していく、それを四つの授業で繰り返し、昼休みになる。

晶が購買部でパンか何か買おうと思いい席を立ち、教室を出ようとしたところ、カナエが昔のヤンキー口調で話かけてくる

「おい、晶あー！ 焼きそばパン買ってこいよあ！ もちろん、金は出世払いだけどな！」

「なんだその昔のヤンキーみたいな」

「買ってきてくれよー」

「嫌だ」

「はいもうきれましたー」

「お前、きれない子じゃなかったのか」

「じゃあスポーツマンシップに則ってジャンケンで決めようぜ」

「聞いてねえしスポーツじゃねえし」

突っ込んだ後、

「じゃあ、いくぞ、最初は」

と晶が掛け声をしている途中に、

「ジャンケンポン！」

カナエ、パー。

晶、チヨキ。

無念、不意打ちをしかけたにも関わらずカナエは敗北を喫した。

「……………」

「……………おら、早く行ってこい、金は出世払いだ」

「お前が倒したのはカナエ四天王の中でも最弱の」

「早く行け」

晶が屋上で一人座って待っていると、背の低い活発そうな女の子がきた。七篠無々子だ。

無々子は晶を見ると、この世の何よりも明るい笑顔を向けながら元氣よく挨拶をする。

「どもつす！先輩！」

露骨に嫌がる晶。

「なんすか、その顔、あたし傷つきますよ！」

「ああ、いくらでも傷つけ、お前のダイヤモンドハートなら大丈夫だから」

「ぐは！ダイヤモンドは衝撃に弱いのだった！あたしのハートは砕け散った！」

「相変わらずテンション高いのな、お前」

「押忍！元氣だけが取り柄であります！」

誇らしげにいう。

ナミセとはまた別の方向でオーバーアクションなのだが、その上表情がころころ変わって忙しい。

「あ、先輩。今度の休日空いていますか？」

「空いてるよ」

「じゃあ、空けたままにしといてくださいね！　じゃ、用事があるのでまた連絡します！」

無々子が風の如く去っていく背中を見送る。

「相変わらず騒がしいやつだな」

態度と言葉は無愛想そのものだが、晶は彼女を嫌ってはいない。むしろ好感が持てるほど、楽しい奴だとすら思うこともある。

「それに……」

存在自体が異世界人という非常識的なものであるナミセとこれまた男か女かよくわからないようなカナエがすれ違うように屋上へと上がってきた。

「最悪だな、常識人が俺しかない」

「ははは、冗談がうまいな晶君、ここに世界の常識、世界のルール、ザ・常識の私がいるではないか」

「はは、もうつつこむ気持ちもわかねえや」

カナエが頼んでいたパンを晶に渡す。

カナエも自分の分を取り出し、晶の右隣りに腰掛ける。

すかさず左隣りにナミセは座り、自分のパンを取り出す。

「ふふ、晶君、どれ、私が食べさせてやるっ、今日は特別サービスで口移しも可だ」

いやらしい目つきのナミセを下衆を見る目で返してやる。

「うぜえ」

「晶君、なかなか冷たいね君は。晶君にカルシウムと愛情が足りない！ ミルクを持ってきたまえ！ 乳飲み子のようにして私から与えれば晶君の冷血な心もいつかあつたはずの赤子のような純真な心に戻るはずだ！」

「あああ！ うっぜええ！ 飯を食わせろ！ 飯を！ おら、散れ、散れ！」

ハエを払うような仕草でナミセを追い払う。

「ずいぶんと余裕がないな、晶君」

「誰のせいだ」

この世の何もかもが気に食わないといったようにパンをかじる。

「仲いいね」

カナエが笑いながら二人に言う。

「だろっ？」

「はあ？」

まったく正反対の反応を返す二人。

「こいつは思考回路がぶっ飛んじまってる残念な子だから、一緒にしないでくれ」

「それはそうだけど」

「今、物凄い勢いで私が馬鹿にされた気がしたのだが気のせいだろうか」

「ナミセさんが馬鹿にされるわけないよー!」

カナエが明るくフォローする。

「そうだな、完璧人間である私を馬鹿にする者などおるまい」

その言葉に無言で晶とカナエは顔を合わせる。

(馬鹿だな)

(馬鹿だ)

昼食を終え、晶たちは自分達の教室へ向かう。

午後の授業中、晶に対してカナエがカタパルトアタックと称して輪ゴムで紙くずを丸めたものを飛ばしてきたことを契機に二人の間で第四三次教室内戦争が勃発し、紙爆撃機カナエスーパーフォートレスの戦略爆撃に対し、晶九七式三号紙攻撃機の雷撃を繰り出した辺りで教師に怒られ強制的に終戦となった。

そして放課後。

昨日のように、カナエが元気に叫ぶ。

「晶！ ゲーセン行こうぜ！ ゲーセン！」

「悪い、今日は用事がある」

「なああーにいいー？ それはこんなにかわいい美少女様のお誘いを蹴ってまで行く必要があるのか？ ああア？」

「お前、男だろ、美少女ではない、美少女では」

「ちえー、ナミセさーん、今日暇じゃない？」

「麗しき姫君のお誘いとあらばぜひともお応えしたいのだが、残念ながら今日はかりは用事が入っていてな」

「ぬお、マジか」

「つーわけで、先帰るわ、じゃあな」

「私もお先に失礼させてもらう、それでは」

軽く手を振って二人は足早に帰っていった。

「……なんか負けた感じがする……」

帰宅した二人は着替えて、外に出る。

着替えるという行為は晶の中で一種のスイッチの役割をしているようにスーツは心を冷やす冷却剤になっている。

スーツの上には黒いチエスターコートをはおる。雑踏の中を歩いているとナミセが話しかける。

「なんだかカナエ君には悪いことをしたね」

「気にするな、仕方ない」

罪悪感はない。

だが、胸は痛む。

カナエを巻き込まないために隠している。嘘をついているのだ。

少しの間を置いて、ナミセが咳く。

「晶君は……、割り切っているのだね」

「まあな、ジジイの下じゃそうもなるさ」

自嘲気味に話す晶に何か胸を締め付けられる。

ああそうか昔の私に似ているんだ、とナミセは胸を少し抑えて思う。

二人は細い路地を抜けて裏通りに出る。

「坊ちゃん、お待ちしておりましたよ」

男の声に晶がそちらを向く。

「すみません、お待たせしました」

以前、地元有力者と話したときのよう丁寧に対応する。相手の男は若く、まだ三十にもなっていないぐらいだった。

「それで、以前の話なんですが」

「ええ、もちろん承っておりますよ！」

会話の節々はやや粗雑な印象を受ける。

所詮は齊藤晶個人に礼を尽くすのではなく、その後ろ、齊藤道雪という大きな力への応対だ、こんなもんだらうと、晶はさして気にせずにいる。

むしろ、昔は自らの若さからなめられていると思い、妙に喧嘩腰の者が多くて困っていた。

今ではすっかり顔役としても働けるようにはなったが。

目の前の男は道雪が後ろ暗い仕事をさせるときの下っ端だ。

しかし下っ端だからといってぞんざいな扱いはしない。

なぜなら彼らの上位組織は道雪と仮にも対等な関係であるからだ。

「若いのを十人ほど集めておきました」

期待通りといった様子でそれに晶は謝礼する。

「ありがとうございます」

「いえいえ、坊ちゃんの頼みなら無下にできませんよ」

その答えに笑顔を返しながら、晶は思った。

この男は欲に忠実だと。

男がにやつきながら離れた位置にいるナミセを見て晶に問う。

「坊ちゃん、あれ坊ちゃんの女ですか？　ありや上玉ですよ、将来きつといい女になりますって」

「御冗談を、そういう関係じゃありませんよ」

下衆な勘ぐりだなと思いつつも晶は小さく笑って首を振りゆるやかに否定する。

話を終えた後、男に別れを告げる。

ばいばい倫理

二人は裏通りをしばらく歩く。

「晶君、何というかこうヒロいね……」

街の景観を見て呟く。

「うるせえ、ちよつとの間ぐらい我慢しろ」

「はっ！ 今気付いたぞ、これから私をあれだろっ、裏路地に連れ込んだり、ラブホ」

「う・る・せ・え」

黙らせて、しばらく歩くと見るからに怪しげな店が見える。

そこに入ると晶はもちろん、ナミセにとっても見覚えがある顔があった。

「あれ？ お前らこんなとこで何してんだ？」

メイド服姿のカナエだった。

「ん、俺は用事を終えて帰るところだ」

一拍置いて、カナエの視線がナミセに向くのと同時にフォローを入れる。

「こいつはこの通りを歩いてたら偶然見かけた」

「何してたの？ ナミセさん」

カナエの質問に驚いたが、すぐに取り繕う。

「表通りから迷い込んでしまっただけ、晶君が来てくれて助かったよ」

ふーん、とカナエも納得したようだった。

肝心の何をしていたかには答えていないが。

「ナミセ、前から思ってたんだがお前やけに日本文化に詳しいよな、誰から教わったんだ？」

話を切り替えるために晶が振る。

「テレビや雑誌なんかで知っているのだよ、そういうものがある、ぐらいの認識だがね」

「……たぶん、昼ドラとか週刊誌で見たんだと思うが、あんまり男の前でエロだとか言うのはやめとけよ」

忠告をしながらカナエに案内されて席につく。

「カナエ君はここで何をしているのかね？」

「バイト、学校には内緒だけどね」

当然、このような店で働いているとなれば学校側が看過するはずもなかった。

「なるほど、そのような格好もそのせいかな」

メイド服を指して言う。
晶が口を挟む。

「やけに凝ってるな」

普段はあまり気にしなかったが、カナエの着るメイド服はそこから市販されているような安っぽいコスプレ用メイド服ではなく、一から作ったものらしく、随所に工夫が見受けられる。

「自作だからな」

「……………」

「惚れるなよ？」

「惚れねえよ」

と言いつつも実際、男でなければ惚れても仕方ないぐらいのかわいさではあった、生まれる性別を間違えているなと晶は心底残念に思う。

「自分で着るんだから可愛いほうがいいだろ、だから自作」

「まあ、そうだが……………」

一瞬、納得しかけて、

「いや待て、根本的におかしいぞ！ 男なんだからかわいくなくて

いいんだよー！」

すぐに否定する。

「いいじゃねえか、星の数ほど男はいるんだ、かわいいのがいても許される」

暴論だ。

「そうだぞ、個性を尊重すべきだ晶君、似合ってるのだから許されるのだ、平均的な年代の女性よりも遙かにかわいいではないか」

続く暴論。

「ありがとー！ それに……」

言いかけた時にテーブル席から声上がる。

「かなちゃん！ 歌ってー！」

「こうやって人気が出ると給料が上がる……、へっへっへ、今日もクソ親父どもと戯れてやるか」

そう言って店員からマイクを投げ渡されると二人から離れた。

「現金な上に最低の奴だな」

『はーい！ 今日もかなちゃん歌っちゃいまーす』

湧き上がる歓声。

カナエの笑顔は男性の心を掴むのに長けている。
その裏にはどす黒い笑みがあるのだろうか。

「見るなナミセ、見ちゃならん」

晶は異世界人にこの世界を誤解してもらっては困るという全人類への配慮を兼ねた自分に我ながら褒めてやりたい気持ちになる。

そもそもカナエの存在自体が色々ぶっ飛んでるし誤解されそうなのだが。

はたから見ればなんてことのないかわいい女の子に盛り上がる中年というよく見る構図なのだが、真実を知る者には女装する少年に群れるおっさんたちという社会的にはかなりやばい光景にしか見えない。

ナミセが何度かカナエ　今はかなちゃんらしいが　の方を見て、モジモジと身をよじった後に言う。

「さ、晶君、あれを……その、私もやってみたいのだが……、うう……、どうだろうか？」

「やめろ」

「なぜだ？　今のままの君が一番かわいいとか言うのか？　それは分かってる。しかし！　老月くんばかり可愛い服を着て、歌って踊れてるいではないか！　いいなー、ひらひらいいなー、着てみたいなー」

羨望のまなざしで見つめるナミセに不安を感じる。

異世界人のファッションセンスはちょっと狂ってるか？　と脳内で議論を重ねていると、ナミセが少し席を外すと言って、どこかへ行った。

『ぷはあー！ かなちゃん酔っ払っちゃいましたー、でへへー』

酒も回り、大盛り上がりする中年の男たちと美少女（男）を横目に晶は以前より親しくしている店主に話しかける。

「マツキー、頼んでた話どうだった？」

「調べといたわ、アツキー」

マツキーと呼ばれた店主はいわゆるオカマである（店は普通のスナックバーでマスターとカナエだけが性別男だけで、他の女性店員はもちろん女性である）。

「宗教団体を名乗っているそうよ、神様がどうのって……」

神、という言葉にふとカナエの方を見るも、敬遠な姿からは程遠いので視線を戻す、目の前にいるオカマ店主もある意味、神を冒瀆をしているようなものなのだが。

神はああだが、彼らの神はどんな奴なんだろうか。

「胡散臭い話ばかりだけど、実際に体を治してもらった人もいるそうよ？」

低い声で出される女言葉にも晶はとっくの昔に慣れた。

「本当に神様に加護されたような聖人だろうが、偽物のペテン師野郎だろうが、どちらにしる敵なんだ、善人だろうが情けはかけない、そいつをやらなきゃ俺が道雪に何されるかわかったもんじゃなからな」

想像したくないもんだ、と吐き捨てる。

「あら、そんなこと言って、昔アタシに情けをかけてくれたのは誰だったかしら？　ねえアツキー？」

なじるような視線。

「知らん、そんな甘ちゃんは」

苦笑い。

二人の談笑は続く。

しばらくすると珍しくナミセの興奮した声が聞こえる。

「晶君！　晶君！」

なんだと思い、そちらを向く。

「似合うかね」

着物を短く切って露出度を上げたような衣装だった。得意げな顔をしているナミセに少し笑う。

「失礼だな晶君、店の女の子がカナエ君の他の衣装を貸してくれてね」

「本当に着たのか。……まあちょっとだけ似合ってるんじゃないのか」

少し綺麗だと思った心をそのまま伝える。

褒めてやると嬉しそうにはいかむ。

「こういつときの笑みは普段の偽悪的な笑みとは違い、素直だと思
う。」

「カスミンと呼んでくれたまえ」

そう胸を張って言って、『かなちゃん』のところへ駆けていく。
それを察知してか、『かなちゃん』が紹介を始める。

『今日はー、かなちゃんのお友達を紹介します』

「マッキー、アイツに客商売は無理だ」

いつもの傲岸不遜な態度を思い出し苦笑する。

『カスミンです、よろしくにゃん』

むせる。

眼を丸くしてそちらを見る。

「できてるじゃない」

「あいつ頭でも打ったか？ というかあんなわざとらしいキャラ付
けでも許されるのか？ かわいければなんでもありなのかちくしよ
う」

しばらくして『カスミン』が馴染んだとみると『かなちゃん』が
千鳥足で笑いながら晶に絡みに来る。

「おーい、晶ー。こんなかわいい女の子が酔いつぶれてるんら、何

かすることあるだろ」

言いながら肩に腕をまわしてくる。

「ねえよ、つかお前酒くせえぞ」

カナエはとろんとした目つきで晶の顔を見る。

「へへ、ちゅーしよ、ちゅー」

頬に唇を近づける。

「やめろ！ お前男だろ、目を覚ませ、俺にそんな趣味はない！」

「照れんなよー、はい、ちゅー、ちゅー」

「ううあああああっ！」

頬に温かい感触が。

俺の純情が……。ばいばい倫理、はじめまして禁忌。

「えへへー、もう襲っちゃうもんね……」

カウンター席から引きずりおろされ、床の上で仰向けの状態になる。

その上にのしかかる『かなちゃん』。

本格的に身の危険を感じた晶はマツキーに助けを求める。

すぐさま、店の女の子数人が『かなちゃん』の脇を抱えて店の奥へ連れていく。

その後、店の奥で何かが割れるような音やリズムカルな打撃音が聞こえてきた。

「相変わらず酒癖わりいなアイツ……、いい加減アイツに酒飲ますのをやめろよ。あと、さっきの女の子たちが前より暴力的かつ隠ぺい工作がうまくなってる気がするんだが……」

「やあねえ、客の前で血祭りはやめろって言ったのアッキーじゃない」

「次は暴力行為自体をやめてもらえるとありがたいな、あんなのも俺の友人なんでな」

ふと、ナミセの方を見る。

顔は若干赤みがかってはいるものの目線や足取り、語調はしっかりとしたもので、酒に強いことが分かる。

晶としては話も聞けたのでさっさと帰って情報の整理を行いたいのもあるがナミセの陽気な様子を見ると少しぐらいいいかと思えばし自分も酒に浸ることにした。

「おい、にーちゃん！ お前もこっちに来て一緒に飲め！」

酔いの回った中年に声をかけられ、先ほど、少しぐらいいかと判断した自分に心のうちで馬鹿野郎がと毒づいた。

喋りすぎ

深夜、騒ぎに騒いだナミセは満足した様子で足取り軽く帰路に
いた。

対照的に隣を歩く晶の顔は非常に暗く、足取りも重い。
背中には泥酔状態のカナエを背負っている。

「晶ー、今日は晶の家にお泊りすゆー」

背中から来るその発言に更に顔を暗くする。

「嫌だ、今日のお前だけは特に嫌だ」

えー、なんでー、などと背中から聞こえてくる。

「ナミセもなんとか言ってみてやってくれ」

「私はそういつえっちはわからないのでな」

どの口が言うか、と突っ込みを入れて、タクシーを拾ってカナエ
を乗せる。

あとはどうとでもなるだろう、野となれ山となれ、だ。

タクシーが行き去ったのを見て、一つため息をつく。

ようやく文字通り肩の荷が下りた。
疲労感が残っている。

「どうしたのだ、晶君、浮かない顔をしているね、酔いすぎたのか

？ ハッ、それならばこのビニール袋に嘔吐したまえ、吐瀉物は私が責任を持ってきちんと内々に使用……ではなくて処理しておくから！ さあ！」

ビニール袋を取り出す。

「ついにいかれたか？ ああ悪い、いかれてるのは最初からだっとな、訂正しよう、完全にいかれたか？ 何お前は勝手に話進めてんだ、こちとらおっさんどもに付き合わされて疲れてるんだよ」

ため息混じりに愚痴を吐く。

「まったく、帰ってさっさと計画を練ろうと思ってたのによ」

「すまない、すまない、明日は私もある程度持っている情報を開示しようと思う、晶君の家で手とり足とり、な」

「真面目にやる気ないだろ」

「真面目も真面目！ 大真面目さ！」

なおもいぶかしげにナミセを見るも、ナミセは笑ってごまかす。

自分の部屋のカギを開ける。

晶は自室で一息つく。

気付かぬうちにかなり酒も回っていたようでベッドに倒れこむとすぐに眠りに落ちた。

アリス・ソフィーは宿敵と出会っていた。

「道雪翁、こんなところで出会うとはね」

敵意をむき出しにした目つきで老人を見る。

「久しぶりの再会だというのに、少しは再会を喜ばないかね？」

老人特有の温かい笑みでその敵意を削ごうとする。

だが道雪の瞳は年齢に対し不相応なほどに炎を宿していたのだ。例えるならば猛禽類のようにぎらついていた。

「ここで君を殺せるのなら再会を喜んだのだけどね」

心底残念そうに言う。

「決死の覚悟でやれば、あるいは」

老人は挑発するような文言を並べる。

それを真に受けず、一つ宣言する。

「道雪翁、君にはいずれ正々堂々と死刑を宣告してみせる、断頭台か絞首台好きなほうを選ぶといい、なんなら銃殺でも構わないよ？」

「衰えたとはいえ男としては華々しく散りたいものだね」

翌日。

パンと紅茶を胃の中に納め、新聞を流し読みした後、家を出る。学校へ着くとカナエの機嫌が非常に悪い。

「うあー、いってえ……、頭マジでいてえ、おい、晶、お前俺になんかしたか？」

「逆に聞こう、お前昨日俺に何したか覚えてるかこの野郎」

「あ？ 知るかよ、記憶飛んでるんだよ、くっそ、いってえ……、二日酔いの痛み以外になんか後頭部にたんこぶまで、できてるんだよなー、酔ったときに転んじまったのか？ あー、痛い……」

昨日、カナエが脇を抱えられ店の奥へ連れて行かれた後の異音を思い出しながらそれは知らないことにしておいた。

「とりあえず、お前は俺にトラウマを刻んだよ、それだけは覚えとけ」

思い出しそうになって慌てて別のことを考える。

「そうなのか？」

唸りながら頭を抑えるカナエをよそにナミセが悠々と登校してきた。

「おはよう諸君！」

今のカナエにとって大きな声は頭に響くようでもだえる。

「む？ どうした老月君、体の調子が悪いのかね？ ああ、皆まで言わなくていい、わかっている、わかっているとも、おそろく二日酔いだね？ わかるよ私には。私のような真に慎ましやかな女性と

言うのは殿方が多くを語る前に察知して動くのだよ、それも私自身は語らずにだ、淑女は多くを語らず、不言実行というわけだ。そもそも女性は黙っているときが一番美しく見えるといわれることもあるくらいに黙ることが必要とされるのであって、決して多くを語る事が美德とされることはなかったのだ、この件に関しては男性にも言えるのだけれどもそれは今は置いておこう。先ほどの件は多くの美術作品がおしとやかな女性を描くのに繋がると思うのだがどうだろう？ 現代の女性にもヤマトナデシコが求められるように、やはり喋ることのない寡黙な女性が今社会に求められている気がするね。かくいう私も寡黙な方なんだが、今の若い女性は少々おしゃべりが過ぎるね。姦しいなんて言葉があるんだが言いえて妙なり、キヤーキヤーいつまでも終わりのない話を続けているのはどうかと思うのだよ、話は二転三転するし、まったくもって気品が足りない。まあ、私は喋ること自体が苦手なので自然と気品が出るわけなのだが……、ああ、もちろん私は喋っていてもあふれ出る気品の良さを隠しきれないわけなんだがね、しかしこれにも困ったもので私のように美しいと何から何まで相手を魅了しているようにとらえられてしまつてね、昨日なんか中年の男がべたべた寄りついてきてなんか手つきとかに下品なエロさを感じたもんだから引つ叩いたら、SMプレイと勘違いされてそこに愛はない！ と断じたのだが、より過激なプレイ希望のおじさんなんかむしる愛がないほうが興奮するみたいでならばと思ひ徹底的にスルーするのだが、それがクールキャラに見えるらしく……、あ、今スルーするってダジャレを言つてしまつたな、ふふ、まあそういうわけで美しすぎると人生も色々大変だということだ。まあそんな大変な人生の中でも寡黙でいることはいいいことだと思うのだ。それはそうと、二日酔いに効く薬は今持っていないのだ、すまない」

言葉の酸性雨を浴びせかけるが如く、カナエにまくしたてる。

「お前の言つとおり、寡黙な女性が今求められているから少し黙つてやれ……」

カナエがもだえながら、強がってナミセに軽口をたたく。

「相変わらず嫌な性格してるね、ナミセさん？」

それに対しナミセは嬉しそうに対応する。

「ん？　なんて言つたかね？　よく聞こえなかったのだが……。今日もかわいいね？　ありがとう、熟知しているよ、ん？　違う？　美しくて性格もよくてこの世で至高の存在だって？　ありがとう、それも知っているよ」

悔しそうにナミセを見た後、力尽きたようにカナエは机に突っ伏した。

授業中、結局そのままカナエは机で眠っていたようだった。

ナミセはノートを切り取って何かを熱心に書きこんでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7899v/>

3つのキスは世界を軽くする

2011年10月6日04時48分発行